
桜舞う

月葉抄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜舞う

【ZPDF】

Z5380D

【作者名】

月葉抄

【あらすじ】

暫く、更新を休ませていただきます。春休み、工藤邸に平次と和葉が遊びに来た。そして、ふとした事から起こる新一と蘭のすれ違い・・・新蘭が主ですが、平和好きの方も安心して読めます。オリキャラ有り

プロローグ

春。

桜が満開に咲いている。

春休み、蘭が工藤邸に遊びに来ているとき、彼らは突然やつて來た。

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴る。

「だれだらうね？」

蘭が聞く。新一は嫌な予感がしながら、言った。

「さあ、まさか・・・な。」

そして玄関に出来る。

「どちら様ですか？」

「新一！」

「か、母さん！？」

ドアの向こうから聞こえた声は、なんと有希子のものだつたのだ。

「新一、元気にしどつた？・・・あつ！」

「なんか今、関西弁が混ざつたような・・・まさか！」

新一は言つて、急いでドアを開けた。

彼の予感は的中していた。玄関には、見知らぬ小さな女の子と、大阪の一人組み・・・平次と和葉が立つていたのだ。

プロローグ（後書き）

どうもはじめまして、月葉抄です。
この作品は、初の投稿になります。
学生なので、更新は不定期になると思います。
まだ文章など未熟ですが、最後までお付き合いいただければと思います。
ご意見、感想などお待ちしています。

第一章

は、服部と和葉ちゃん！？」

新一が間の抜けた声をだすと、平次が言った。

「おう、遊びにきたで～！」

「つたく、毎回毎回アポ無しで来やがって。それに、いい加減変声機使つてイ

タズラするのやめろよ・・・」

そう、さつきの有希子の声は蝶ネクタイ型変声機で和葉が出したものだったの

だ。黒の組織が壊滅したとき、この一人は「ネタに使える」などと言つて（半

強制的に）新一から譲り受けっていた。

「ええやん、これ、ネタに使うんに結構人気あるんやで。」

あくまでもマイペースな和葉に新一は言葉を失つていた。

「つか、高校でまで使うなよ・・・」

「新一、誰だつた？・・・和葉ちゃん、服部君、久しぶり～」

蘭が部屋から出てきて驚いたように言つた。

「蘭ちゃん、久しぶりやね。いきなりおしかけてもーて、ごめんね。」

「ううん、全然かまわないよ～ほら、一人とも入つて。」

平次と和葉が家に入ろうとするとき、小さい女の子の声がした。

「おじやましまーす！」

見てみると、五、六歳の小さな女の子が和葉の後ろに立つていていた。

「うわあ、カワイー。この子だれ？」

さすが、子供が好きな蘭が真っ先に反応した。

「こいつは楓つちゅうんや。和葉のいとこでな、春休みやから大阪に来とつて

ついてきてまつたんや。」

平次が説明する。

「あたし、東京来てみたかつたんだー！」

楓が明るく言つた。

「え、楓ちゃんて大阪に住んでるんじゃないのか？」

「ちやうちやう、楓は北海道に住んどるのや。」

楓は靴を脱ぐと家の中に入つてはしゃぎ始めた。

「か、楓！ そんなにはしゃいだらあかんやない。こい、工藤君ちやねんで。ほ

んなら、おじやまします。」

和葉は言つて、家の中に入つていつた。平次も和葉に続いて入る。

「おい工藤、荷物はいつもの部屋に置いとくで。」

新一は小さな声で呟いた。

「もう勝手してくれ・・・」

第一章

「とにかく、今日は何日」ひたすら言つてゐる氣だ?」

やつと荷物の整理が終わり、楓も疲れて寝てしまつて落ち着いた時、新一が聞いた。

「せやなー、ほんまは春休みギリギリまでいたいんやけど、楓がいるさかい、三田で大阪帰るわ。」

「それまではいつも通り、ココに泊まらしてもいいわ。よひじへーな。」

新一はまたか、とうなだれる。

「それじゃあ、私も泊まりたい! 新一、いいでしょ?」

「別にオレはかまわねーけど、おじさんが許してくれるかどうか。」

「いいわ、絶対許させてみせるから!」

そう大声で言つと、楓が起きてしまつた。

「うーん、おはよう。」

「「めんね、起こしちゃつた?」

「名前、なんていうの?」

楓が無邪氣で聞いてくる。

「私は蘭、ていうの。」ひちは新一よ。よろしくね、楓ちゃん。」

「蘭おねえちゃんと新一おにこちゃん? よろしくね。」

「おう、よろしくな。」

「じゃあ、電話するね。」

携帯を出して小五郎に電話し始めた。

「もしもしお父さん? 私だけど。今日、和葉ちゃんと服部君がこっちに来てるんだけど、今日から少し新一の家に泊まるからね。」

携帯から小五郎の大声で聞こえてくる。

「あいつの家に泊まるだと? 絶対にダメだ! それに飯はどうすんだ。」

・・・

「その間はポアロで食べてね、それじゃ。」

「お、おい蘭！」

蘭は勝手に電話を切ってしまった。

「おい蘭勝手にいいのかよ、ていうかおじさん許していないし。」

新一が呆れて呟つ。

「家の人内緒でお泊りしかけないんだよ。」

楓が咎めるように呟つた。

「楓、蘭ちゃんは家に電話してたやない。」

和葉が呟つと、楓は少し静かになつた。

「楓のやつ、ミラーな事を気にするさかい、ほとほと困つとるんや。さ。

きつとおばちゃんの影響やな。」

平次が呟つと、楓はまた眠つてしまつた。

「それで、もう午後だけど、今日はこれからどうか行くか？」

新一が聞く。

「せやな、遠くはもう行けんし……」

「そうだ、杯戸公園の桜祭りに行かない？」

蘭が言った。

「そういうえば、夜に桜をライトアップして、花火を打ち上げるつて……」

「ほんなら、今日はそこでええな。」

平次も賛成した。

「じゃ、そこで決定だな。楓ちゃん、起こすか？」

「置いてくわけにもいかんし、起こしてみるわ。」

和葉が楓をゆすつて起こした。

「うーん、何……」

「楓、もう起きなあかんで。これから桜見に行くさかい、起きんと置いてくで。」

そう呟つと、楓はすぐに起き上がつた。そして、

「楓置いて行つちやいや！」

そう呟つてまた寝てしまつた。

（これから3日間、過ぎた後いつたい……）

新一はやつ細二、心の中で溜め息をついた。

第一章（後書き）

どうも、月葉抄です。

この小説のアクセス数が、1000人突破しました！·ありがとうございます！

今回は、最後の部分の楓が、少し天然になってしましました···
次話の更新は···また少し間があいてしまうと思いますが、完結
までよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380d/>

桜舞う

2010年10月21日23時02分発行